秘

招請状

101

二・七集会以来、当局と民青・革マルの自治会が一体となった時子山管理体制にたいする造反をおしすすめて来たわが反戦連合は、運動のひろがり、ふかまりとともに決定的な主体的危機に陥っている。造反が理に先行する現代の革命にこれは必然の危機とはいえ、それが運動に関る者――われわれ自身をはじめとして――の思想的怠慢にまた依るものであることをしっかりとつかみ、それを克服しなければ、われわれ自身が管理社会のごみために放りこまれみじめに自己表現を封ぜられていくだけでなく、早稲田の四万の学友の偉大な造反のエネルギーを卑小な政治主義者どもの手に委ねることになってしまうであろう。四・一七に本部封鎖をし、解かれてなお四・二八にやりかえした中で、われわれはわれわれの様々な意図・思惑にかかわりなく、早稲田四万の学友の運命を引きうけるという宣言をしてしまったのである。時子山管理体制によって否応なしにわれわれと〝団結〟している全学友に、反戦連合は責任をもっている。彼らの始源エネルギーをブルジョアジーにも、近代マルクス主義両派にも、政治主義諸派にも委ねるわけにはいかないのだ。

反戦連合はすでに解体した、といってすましている諸君には〈存在論解除〉が必要なようである。個人原理によって、表出されたものを絶えず「生きられたもの」によって解体しつつ新しい、ブルジョア社会を超える関係性を創出していこうというのが反戦連合運動の出発点であったとすれば、われわれの危機は、〈見る者（ヴォワイヤン）〉となるための錯乱が、ナンセンス・ドジカルの三無〝主義〟すなわち錯乱のイデオロギーへと酸化していった地点にあった。ひらきなおることによって、解体が解体でなくなったのである。今やわれわれは、反戦連合解体の新しい質を保証する新しい形態をつくりあげねばならない。われわれのユートピアが錆びついて現実と対決しえなくなったところにさまざまな現実主義――改良主義、機会主義、政治主義、軍事主義――がわれわれの隊列の内部にまで抬頭する余地が生じたのであり、そのことがまた反戦連合をしてこの激動の過程でしばしば「アンチ・セクトのセクト」――いわゆる「固定化」に堕しめたのであるとすれば、解体の新しい質とは、新しいユートピアのことにほかならない。日大・東大・京大斗争の提起した〈反大学＝大学解体〉のユートピアから規定されつつ出発したはずの反戦連合運動は、いま、このユートピアと現実の対決の形式、自身の運動形態の持続性を見喪う中で、ユートピア自体の質をまた問われているのである。

早大全共斗はどこへ行くのか？反戦連合はどうするのか？四万の全学友が、全国全共斗の同志たちが、全世界の革命人民が、われわれに問いかけている。四ヵ月の実践をふまえ、いまやわれわれは多くのことにこたえねばならない。時子山管理体制とはなにか？近代マルクス主義〈また「革命的」〉とはなにか？中教審答申・大学治安立法とはなにか？大学とは、学問・教育とはなにか？われわれはなにを、どう変革しようとしているのか？大学解体＝反大学、精神労働と肉体労働の分離の止揚、永続的文化革命というユートピアをわれわれはこれらの問いにこたえる中でうち鍛えとぎすまし、豊かで具体的な形態を与えていかなければならない。

われわれは六・X討論集会を「第二の二・七」として設定し、当面しているさまざまな問題を討論する中でわれわれの斗いの大方向を確認しあって、高い作風と戦略をもち、早大全共斗に首尾一貫した責任をとるところの第二期反戦連合運動の出発点としたいと考える。ちりぢりになっている反戦連合の同志諸君、反戦連合とともに早大斗争を、早大全共斗を担おうとするすべての同志・友人諸君が夫々の総括と展望をもってこの討論集会に参集されんことをよびかける。

☆日時・場所は口頭で伝える。

六月三日

反戦連合